特定非営利活動法人
TMAT
(徳洲会医療救援隊)
ニュース

HEADLINE

TMATニュース第4号発行のご挨拶 …… 1
DEVNET winner 賞を受賞 …… 1
ミャンマー連邦サイクロン被災 …… 1
先遣隊活動とコーディネーター業務 …… 2
本隊の医療活動と災害看護 …… 2
岩手・宮城内陸地震 …… 3
栗原市より …… 3
先遣隊に参加して …… 3
先遣隊として初めての出動と病院の緊急時体制 …… 3
中国・四川大地震 …… 4
中国での先遣隊活動 …… 4
賛同者の声 …… 4
第3期終了のご挨拶 …… 4

第4号　2008年(平成20年)11月30日発行:特定非営利活動法人TMAT
〒102-0083　東京都千代田区麹町4-6-8　ダイニチ麹町ビル2F
電話:03-3263-8136、FAX:03-5214-6664　ホームページ:http://www.tmat.or.jp、E-mail:info@tmat.or.jp

TMATニュース 第4号発行のご挨拶

徳田　哲
TMAT理事長

NPO法人TMATの災害時緊急医療支援、医療技術支援活動に際し、皆様からのご支援、ご協力に感謝申し上げます。おかげさまで3年目の会計年度を6月で終えました。

国内外で災害が相次いだ昨年度は、多くのTMAT会員が被災地へ派遣され活躍いたしました。TMATでは、このような災害時の医療活動に主体的に携わる人材を育成するベーシックコースと、被災地での活動時のリーダーを育成するアドバンスコースを開催しております。各病院の危機管理体制の構築にも大変役立つ内容となっておりますので是非、積極的にご参加頂けたらと思います。

これらの活動は全て皆様からの年会費、ご寄付により支えられております。本年度も引き続き、国内外の災害時に迅速な医療活動を展開し、被災地の皆様のご要望にお応え出来るよう努めて参ります。皆様お一人お一人の温かいご支援、ご協力を宜しくお願い申し上げます。

福島　安義
TMAT副理事長

日頃よりNPO法人TMATの災害医療、技術支援、国際協力活動へのご理解とご協力をいただきありがとうございます。

最近はミャンマーのサイクロン被災、中国四川省の地震、東北地方の地震等の災害が頻発いたしました。TMATは日頃からの協力体制を活かして現地協力者と共にそれぞれの災害において迅速な情報収集を行い、延べ36名の職員と6台の救急車を派遣し、避難所を巡回、医療活動等を行うことができました。これらの活動をご支援くださる皆様に心より感謝申し上げます。

今後も「生命だけは平等だ」の理念・哲学の下、継続した活動を行ってまいります。引続きご支援賜りますようお願い申し上げます。

DEVNET winner 賞を受賞

医療法人徳洲会の徳田虎雄理事長とスリ・カルヤワチ医師（インドネシア　バリ島タバナン病院）が国連開発計画NPO法人日本DEVNET協会よりDEVNET winner賞を受賞しました。これは途上国における女性の起業、社会活動及びその支援・普及などの業績が顕著な成果をあげた組織または個人を顕彰するものです。

徳洲会グループとTMATは2004年のスマトラ沖大地震及びインド洋津波と2006年のジャワ島中部地震において災害医療支援を行いました。その際の現地協力者のリーダーがカルヤワチ医師でした。カルヤワチ医師らは災害医療を通じて技術移転を受け、後のタバナン病院における医療技術の向上とタバナン・徳洲会透析センターの発展に寄与し、その功績が称えられました。

受賞式
前列左から2人目徳田哲TMAT理事長
3人目スリ・カルヤワチ医師

ミャンマー連邦 サイクロン被災

原野　和芳（四街道徳洲会病院　医師）

ミャンマー連邦は5月2日深夜から3日午前にかけて大型サイクロンの直撃を受け、南部地域に甚大な被害が生じた。6月24日の公式発表で死者数は8万4537人、行方不明者は5万3836人とされている。

TMATでは6日のサイクロン被災の報道を受けて先遣隊派遣を決定。前田専務理事をアドバイザーとし、団長原野（四街道徳洲会病院）、早田医師（茅ヶ崎徳洲会総合病院）、宇野看護師（四街道徳洲会病院）、コーディネーター鷲巣（静岡徳洲会病院）、通訳チー・トゥ・シェインの計6名が選出された。派遣決定に伴い四街道徳洲会病院では持参物品の準備が夜を徹して行われた。先遣隊は情報収集が目的のため、衛生材料や医薬品等の他に、通信設備も重要な携帯品となった。

翌7日ビザの即日発行を受け、8日ミャンマーに入国。ヤンゴン市内は電柱や街路樹が倒れ、復興はまだ進んでいない様子だったが、郊外では市民が助け合う活気あふれる光景を見ることができた。ヤンゴンに拠点を構えている日本人から軍政府による監視の厳しさを聞き、活動は地脈、人脈がなければ危険であるとアドバイスを受けた。そこで通訳のシェイン氏の故郷、ヤンゴンから南へ160キロほどのところにあるミャアウンミャへ移動することにした。

ミャアウンミャは周辺地域から避難民が集まっており、朝3000人の避難者が夕方には1万人に増え、更に船中には700名の被災者が待機しているというような状態であった。27箇所ある避難所のひとつ、第○高校の校長と金網越しに面談を行った。そこには410名（男性280名）を収容し、今後更に100名の避難民を受け入れる予定だという。怪我人110名、下痢4名、脳梗塞2名がいるそうだ。外国人と現地人の接触は厳しく制限されているが医療ニーズは高いと思われた。

このような先遣隊の報告を受け、東京のTMAT本部では医療支援チーム本隊を派遣することが決まり、全国のTMAT会員に向けて募集が行われた。26名の応募の中から濱田看護師（茅ヶ崎徳洲会総合病院）と佐藤薬剤師（中部徳洲会病院）が選ばれ、コーディネーターの萩原東京本部職員とともに出発した。空港では持参物資を没収されるなどのトラブルに遭いながらも何とか入国を果たし、11日に先遣隊と合流した。本隊が持参したのは感冒、外傷、疼痛等に対応するための薬剤や医療資材が中心であった。

先遣隊の出発　筆者前列中央

12日朝TMATは、地元の医師と若手3名の男性研修医、2名の女性研修医と話し合いを持ち、地元医師団では手に負えない4名の患者さんをTMATが宿泊するゲストハウスまで連れて来てもらい治療を行うことになった。ところが、一緒に来ることになっていた若手医師は一人もおらず、上級医師らが早田医師と原野に診察を要請された。恐らく、我々との会合の後に、家族や知人から日本人と接触することを咎められたと推察され、若手医師らには責任所在もふくめ、医療連携チームに参加することは難しかったようである。このことにシェイン氏は深く失望していた。

翌日は約700名の避難者のいる学校の一画に診療所を開設することができた。シェイン氏とチッコ氏が通訳となり、診察を開始した。どれくらいの時間か分からなかったが、次々に患者さんが誘導され、捌くように治療を行った。挫創、釘刺傷、脱臼、腹痛や肺炎を起こしている人がおり、応急処置をされている方もいたが、被災して以降、全く医療機関に受診していないような外傷患者さんが多かった。

診療の途中で軍が当該高校に来る、午後3時までに全ての外国人はミャアウンミャから退去する命令が下りたとの情報が入った。ドタバタと荷物を整理しバスに詰め込んだ。残された医療用具は地方病院に寄贈し、避難民の活動に役立ててもらうことにした。

ミャアウンミャの知事、警察署長、地区病院院長らは「TMATに面会することは難しいが、基本的には支持したい。しかし、許可書などの文書にすることはできない。」と言い、行政にもTMATの活動に賛同的な職員がいて、「何とか感謝の意を表したいとしているらしい、朝言ったことが昼には変わり、夜にも変わる国の体

避難所となった学校で金網越しの面談

ミャンマー連邦　サイクロン被災

制を恥じているが、理解して欲しい。」との言葉を聞かされた。

医療ニーズはあったが、一般市民、医師や社会的地位のある名士を含め、協力を仰いでの活動自体が難しく、やれることは第1陣で十分であり、第2陣以降の派遣は難しいとの結論となった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

以上が活動行程ですが、実にささやかな援助で終わりました。私も幾つかの途上国で災害救援活動を経験しましたが、インドネシアのアチェ以上に動きにくい状況でした。それでも今回の派遣で幾人ものすばらしいミャンマーの方々と価値ある時間を共有するという得難い経験ができました。活動した場所の名称や何人かの協力者の氏名は伏せていますが、帰国した際には、まだ諸外国の援助をミャンマー政府が受け入れていなかった為、協力者の親類縁者に迷惑が及ぶことを恐れ、取材にも固有名詞を明かさないよう注意を払っていました。現在は協力者より、世界で最初にミャンマーの被災者を助けてくれた団体が無視されるのは自分たちが辛いので、是非、活動をもっと広報して欲しいと要望され、ここに文章にしてお知らせすることにしました。

現地医師らとの打ち合わせ

先遣隊活動とコーディネーター業務

鷲巣　圭一（静岡徳洲会病院　総務）

私のTMAT活動は、5月6日12時頃の一本の電話から始まりました。先遣隊にコーディネーターとして参加してほしいという依頼でした。TMATベーシックコース（4頁※参照）を受講していたものの、実際に何ができるかは未知数で、始めは不安しかありませんでした。

出発前の成田空港で「1．徳洲会グループとして、現地の方々の為に何が出来るのかを、自分達の視線で見極める」、「2．安全で実りのある活動が実践でき、全員が元気に帰国する」の2点を確認し合いました。

1については、活動拠点になった地方都市ミャアウンミャ出身の有力者であるチー・トゥ・シェインさんの協力が得られ、報道からは見えない現地の人々との触れ合いを通して自分達なりの判断ができたと思います。2については、現地での人脈を頼りに医療活動を行なうことができ、本隊第1陣を含めて全員無事に帰国できました。本隊第2陣の派遣は見送りとなりましたが、その決定の為の情報収集という点においても、実りのある先遣隊活動だったと思います。

コーディネーター業務については、軍政という国情から、活動は地元の方の了解を得て行なうという大原則があり、主体的に活動できたかというと十分ではなかったかもしれません。主な任務は、活動の記録を残す（写真・行動記録）、東京のTMAT本部との連絡、部隊の金銭管理でした。記録に関しては、写真撮影の制限があり十分なものが残せませんでした。音声録音用のICレコーダーなどを持参できれば活用できたのではと思います。本部との連絡については、電話やパソコンといった通信機器を自由に使用できず、定時連絡が滞ったり、現地の情報を簡単に送ることができなかったり歯がゆい思いをしました。お金は隊の皆さんの協力でしっかりと管理することができました。

今回、初めての海外派遣でしたが、TMATベーシックコースの実技にある通信機器の使用や情報伝達訓練を実践できた場面が多かったです。また、活動に制限がある状況で、現地の方々と交流できたのは良かったと思います。診療を受けた直後に現地の方から握手を求められたときは、TMATの活動意義を実感しました。我々には、困っている人の為に何ができるか、という究極の目的があり、そのためにできる活動を、今後も自分達の目で実際に見て判断していく必要があると思います。

先遣隊の早田医師、宇野看護師と筆者右

本隊の医療活動と災害看護

濱田　達也（茅ヶ崎徳洲会総合病院　看護師）

TMAT本隊として、5月10日に成田を出発し、バンコクを経由してミャンマーに入りました。軍事国家は当時、海外からの支援チーム受け入れを拒否していて、〝魔の税関〟をやっとの思いでパスしての入国でした。

サイクロン後の荒れ果てた光景には、凄まじいものがあり、道行く中で、多くの木々が倒れ、まさしく荒地となっていました。

我々は昼夜を問わずに、医療活動が展開出来る方法はないものかと思案しましたが、軍政の下では、単独活動が出来ませんでした。しかし協力者のチー・トゥ・シェインさんとご家族が色々と手配してくださり、ゲストハウスでの診療が出来ました。

また、翌日、避難民が700人、55名程の傷病者が存在している避難所での診療が、時間限定で可能となり、外科チーム・内科チームに分かれ、現地のドクターと協力して、42名の傷病者を診察しました。

そんな中で急遽、出国が決定しましたので、約2時間程の慌ただしい中での、医療活動でしたが、我々TMATチームと現地ドクターチームは、初めて、「心」が一つになれたような気持ちになり、「言葉の壁」を超え充実した時間を過ごせました。只一つ、心残りなのは、時間が許せば、もっと多くの方へ、もう少しゆっくりと医療活動を展開できたのではないかと思います。

約1週間の活動でしたが、逆境での活動のために、「何故、そこまで大変な思いしてまで、活動するのか」と考えさせられました。しかし、常に思うことは、「生命だけは、平等だ」の理念です。この理念がある限り、一つ一つの言葉を噛みしめて、我々は、活動を展開します。

「災害看護」とは、病院と被災地の違いは、ありますが、普段と何一つ、違いはありません。状況（現場）の違いだけで、看護の極意は、何一つ変わりありません。今、出来ることを、限られた資材の中で、展開するだけです。常に、アンテナを光らせて置けば、誰でも、いつでも、出来るのが、災害看護です。皆で共に頑張りましょう。

皆様の、ご協力をお願いいたします。

先遣隊と本隊、協力者ら筆者後列中央

朝300人の避難者が夕方には1万人に増え、更に船中には700名の被災者が待機しているというような状態であった

岩手・宮城内陸地震

先遣隊に参加して

田代　善彦（四街道徳洲会病院　医師）

救援ヘリコプターに乗り込む

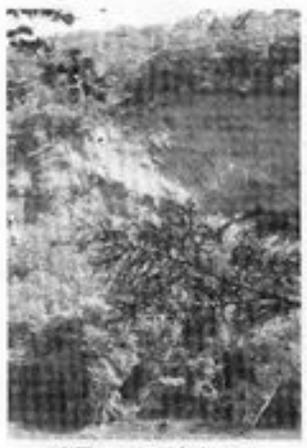
6月14日午前8時43分頃、岩手県南部を震源とするマグニチュード7・2の地震が発生しました。すぐに先遣隊派遣が決定され、10時35分には仙台徳洲会病院から、11時には四街道徳洲会病院から救急車2台と10名の先遣隊が出発しました。

仙台先遣隊は12時に栗原市に到着し、被害が大きかった同市花山地区と岩手県奥州市を視察、関係者らと面談を行いました。市内の被害が少ないこと、山間部の被災地へは道路が寸断していて入れないこと等を確認し、医療支援チームの拠点、栗原中央病院へ向かいました。

四街道先遣隊が同病院に着いたのは17時で、仙台先遣隊と共に医療関係者の合同ミーティングに出席しました。既に東北を中心とした医療チームが約20待機していました。そこでTMATへの活動の割り当てはなかったため、仙台先遣隊は帰路につき、四街道先遣隊は独自に避難所を視察することにしました。

50数名が避難していた栗原市栗駒地区避難所は、日中に仮設診療所が立ち上がっており落ち着いた様子でした。次に岩手県奥州市の対策本部を訪問し、更に一関市の対策本部にも連絡を入れましたが、いずれも医療ニーズは足りているということでした。しかし午前0時をまわったころ栗駒避難所の保健師から連絡があり、翌朝栗駒山へ向かう救援ヘリコプターに同乗することになったのです。

栗駒山の山脈ハウスには34名が避難しており、そのうち10名を診察しました。避難の際に転んだり、ホコリで咳が止まらなかったりと災害時に多い症例が見られました。常備薬を持ち出せなかった方には、かかりつけ医の診察を受けられるように調整が行われました。次に訪問したくりこま高原自然学校を利用している16名には医療ニーズがなかったため、土砂崩れで甚大な被害を受けた駒の湯に足を運びました。行方不明者の救助活動中で、医療ニーズはないことを確認しました。下山後、栗原中央病院にて栗駒山での活動を報告し、先遣隊活動は収束させることとなりました。今回の地震では医療機関に大きな被害がなく、近隣の災害医療チームの対応が迅速であったため、TMATの本隊派遣は見送られました。


地震による地すべり

栗駒山での巡回診療

四街道からのTMAT先遣隊は11時前に出発し、17時前に栗原市立病院に到着したが、すぐに人的被害は少なく医療ニーズがあまりないらしいことがわかった。私は内田看護師（四街道徳洲会病院）と一緒に市内の視察へ出た。視察できた範囲で建物の倒壊等や、土砂崩れによる道路閉鎖等は見当たらず、普段と変わらない印象だった。

その後のDMATのミーティングに参加し、医療ニーズはないと発表された後、早田隊長（茅ヶ崎徳洲会総合病院）は避難所を回るという、足で稼ぐ行為に出た。避難所には道路が寸断され孤立した住民が80人ほどいたが、混乱はなく、病気・けが人もいない模様だった。早田隊長はそこの保健師に、TMATの説明と医療ニーズがあればすぐにでも駆けつけると説明し、名刺を渡した。隊長のこの行動はすばらしかった。

奥州市の対策本部も視察して宿泊先へ向かっていた時、先ほどの保健師から、翌朝孤立した村落へ健康調査に行くので同行してほしい旨の連絡を受けた。隊長の名刺のおかげである。もちろん承諾し、翌日7時のヘリで駒の湯温泉近くの施設へ向かった。

そこには村落を離れずに生活を続ける2、30人前後の人たちがいた。診察してみると多いのは打撲類だった。しかし湿布がない。救命道具はあるのに、対症療法の薬剤がない。手荷物の選択ミスであった。蘇生が必要な患者がいればすでに搬送されているはずで、ここにいる人々は打撲やかぶれといった症状の方が多いのである。風邪薬もなく、ほとんどすべて保健師の持っている薬剤に頼ってしまった。救急車から離れて診察をする場合、何が必要なのかをしっかりと吟味しなくてはならないことを学んだ。

その後、駒の湯温泉へ。現場は地滑りによる生き埋めの方がまだ残っているため、必死の救助活動であった。温泉宿周辺は泥で覆われており、自然災害の恐ろしさに慄くばかりであった。自然災害に対しての活動は、TMATとしてどこで活動すべきか明確にする必要があると思った。病院で後方支援を行うのか、避難所で診療を行うのか、最前線で救命処置を行うのか、色々な状況を考えて教育プログラムも考えなければならないのであろう。

先遣隊四街道チーム　筆者右端

災害はまたすぐやってくるだろう。日ごろの心構えが大事である。早田隊長の足で稼ぐ方法を是非真似したい。

駒の湯温泉の土砂崩れ現場

栗原市より

小野寺　康子（栗原市市民生活部健康推進課　主任保健師）

栗駒山の中腹にある耕英地区は、山崩れと道路の寸断で孤立状態となり「山脈ハウス」に約30名の人たちが避難していました。このため市の保健師が状況把握及び救護活動として地震の翌朝にヘリで現地へ向かうこととなりました。その際、栗駒の避難所で声をかけてくださったTMATの早田先生に連絡をさせていただきました。深夜、突然の電話にもかかわらず、救護活動の依頼を快く引き受けていただき、感謝の気持ちでいっぱいでした。

翌朝7時ヘリポートを出発、眼下に広がる山並みのいたる所が崩れ、震災の爪あとに心も身体も震えました。避難者は炊き出しをするなど思ったより元気そうに働いていました。早速個室を確保し先生方に傷の手当をしていただきました。時おり余震のある中、被災者が安心できるように話しかけながらの処置に感動しました。後日手当てを受けた耕英地区のみなさんから「あの時お医者さんが来てくれて安心した。」という感謝の言葉がたくさん寄せられました。TMATの先生方にお会いでき、TMATの活動について理解することができました。本当にありがとうございました。

栗駒山山頂にて　筆者中央

先遣隊として初めての出動と病院の緊急時体制

高橋　由美（仙台徳洲会病院　看護師）

災害の予感から実体験へ

8時43分、地震が発生したのは、朝礼で「毎年子育てをするはずの燕の姿がなく気になっています。災害を察知しているのでしょうか？」と話した直後でした。仙台は震度5弱、院内は幸いにもエレベーターが停止した他ほとんど被害はありませんでした。ホッとしたと同時に災害の予感は一変し、宮城県沖地震へ向けた本格的な体制作りが必須と確信しました。これは多くの職員が感じたことだと思います。

先遣隊派遣の要請を受け、院長とメンバー編成で優先したことは①診療体制に支障がない②災害医療の経験者あるいは研修修了者③地理に詳しい④度胸があり、問題解決、判断・決断が責任を持ってできる⑤今回の経験を病院の体制作りに活かそうと思う、この5項目のいずれかに該当することでした。私は本来、病院を離れるべきではないのですが、新潟中越での経験と⑤の思いが強く、院長に許可をいただきました。

10時35分仙台チームが病院を出発。阪神淡路大震災や新潟中越地震での経験が一層使命感を強くし、ひたすら栗原市を目指し、一番乗りで栗原市役所に到着しました。都合二日間の先遣隊活動で受けた病院幹部の対応、その場で見てきた職員の姿勢や行動、DMATの活動等全てが、今後の病院の緊急時体制作りへの学びであったと思います。日ごろの自助努力で地域力を高めていくことが重要だという実感です。

病院と地域との緊急時体制作り

看護管理者としては、住民のあらゆる健康レベルに対応した地域医療・看護活動を行うなかで、災害医療についてももっと積極的に取り組むべきだと考えました。早速7月26日（土）に計画された、病院が入会する「泉中央町内会夏祭り」の会場でAED講習会とTMAT先遣隊のパネル展示も行いました。お祭りに「AED？」「TMAT？」と疑問に思われるかもしれませんが、町内会長さんはじめ地域の皆さんの要望でもありました。今後も住民参加型、地域密着型で健康増進や災害対策を進めていきたいと考えています。病院として緊急時に備えた体制やマニュアルの整備はもちろんですが、災害医療について専門的な知識の修得や技術のトレーニングを行っていくことも重要です。仙台徳洲会病院を会場に8月23日、24日にベーシックコース（4頁※参照）を開催することが決まりました。地域の方々にも案内し、共に体制作りを学び、考える機会になると期待をしております。

夏祭り会場にて筆者右

中国・四川大地震

5月12日、中国の西部で現地時間14時28分マグニチュード7・8の地震が発生しました。中国衛生局（日本の厚生労働省にあたる）に医療支援の申し出を行ったところ、余震と雨、インフラの破壊等のために安全が確認できず受け入れられないとの返事を受け、一旦、先遣隊派遣は見送られました。

しかし15日13時頃、日本政府に中国政府から救援隊派遣要請が出されます。民間の援助受け入れも始まることが見込まれたため、先遣隊派遣が決定します。メンバーの選出と物資準備が行われ、同日19時には先遣隊3名（原野和芳四街道徳洲会病院院長、野口幸洋四街道徳洲会病院管理栄養士、近藤英子徳洲会東京本部中国担当）が出発しました。

震源から南東約90キロにある四川省成都は地震の被害は見られず、多くのボランティア志願者が列をなしていました。四川大学華西病院等では病院前トリアージ（※1）が行われ、院内の多数の患者に対しても医療スタッフが十分に診療にあたっている様子でした。被災地までは軍、警察による検問があり到達できませんでした。現地協力者と面談し支援の意思を伝えたところ、被災地と周辺都市には中国全土から既に2000をこえる医療チームが入っている、被災地への立ち入りは強く規制されているとのことでした。四川省衛生部でもTMAT受け入れについて審議されましたが、国内の医療チームで人は充足しているため許可できないとの結論となりました。

支援の意思をアピールする

これを受けて先遣隊活動は終了させることになりました。北京で協和医科大学の医師ら協力者たちと面談を行い、成都での報告と持参した薬剤の寄付を行いました。薬剤は大学を通して被災された人々に届けられる予定です。今回の地震では四川省汶川（ブンセン）を中心に、死者6万9197人、負傷者37万4176人、行方不明者1万8237人（7月16日現在）の被害が出ています。被害に遭われた方々にお見舞い申し上げますと供に、今後の中国医療機関との協力についても引続き検討していきます。

※1トリアージ
災害発生時に病院や避難所に集まった多くの傷病人について、緊急性や重症度に応じて治療の優先順位を決定していくこと。

※2ベーシックコース
災害救護や国際医療協力についての知識を習得し、災害時の迅速で適切な医療活動、病院防災への主体的な取り組みができる人材の育成を目的としている。

詳細はTMATニュース3号もしくはTMATウェブサイトへ。

病院前トリアージ

ボランティア登録をする

中国での先遣隊活動

野口　幸洋（四街道徳洲会病院　管理栄養士）

私がTMATに関わるようになったのは、勤務先で開催されたベーシックコース（※2）を受講してからです。はじめは災害医療や国際協力は医師や看護師がやるもので、私のような管理栄養士には関係ないと思っていました。ところがこのコースで、管理栄養士にもやれることがある、もっといえば必要ない職種はないことを学び、TMATに興味が湧きました。現在はコース内で行われる「自炊訓練」を担当させていただいています。

今回、先遣隊活動に始めて参加させていただきました。現地では大きな余震が続いており、被災地への立ち入りが厳しく制限されている状況でした。現地の関係者になんとか被害のひどい地域へ行きたい旨を伝えるものの、文化も言葉も違う人とのコミュニケーションは予想以上に難しいものがありました。しかしこれまで徳洲会と現地との関係が良好であったため、何度も話し合いの席を設けることができ、我々の誠意を伝えることができました。民間レベルでの協力が大切なのだと感じました。今後のためにも今回TMATが中国を訪問した意味は大きかったと思います。

また、TMATには災害発生時、災害や現地に派遣された隊員の情報が届くメールシステムがあります。活動に興味がある者にとってこの情報がいかに重要か、私は身を持って感じていました。そのため、先遣隊のコーディネーターとして派遣される以上、情報を細かく連絡することを心がけていました。

このような貴重な経験ができたのも支えてくださった多くの方々いたからこそと感謝し、今後も国内外の災害に備え努力していきたいと思っております。

薬剤の寄贈　筆者左

賛同者の声

小野　勝彦
（信濃化学工業株式会社　代表取締役）

昭和五十四年「馬鹿か狂人でないと世の中は変えられない」という週刊誌で徳田先生を知り、その後運命に導かれるように東京本部職員として入職、羽生病院、奄美群島を駆け巡った選挙戦等を通して多くの方々と出会い、戦友また生涯の友を得て今日に至っています。退職後も愛情溢れるご支援、経営指南等、公私に亘り徳田先生より薫陶をいただき心から感謝しております。

先日TMATの紹介で、当社で製造している食器をアフリカのアンゴラの病院に寄贈させていただき、アンゴラ共和国駐日特命全権大使アルビノ　マルンゴ氏より礼状が届けられました。私どもの命でありますプラスチック食器を、有効に利用していただけるのはこの上ない喜びであります。今後ともTMATのお役に立てるよう継続的に支援できれば幸いと思っています。

第3期終了のご挨拶

関口　弘美（NPO法人TMAT事務局）

NPO法人TMATは皆様の温かいご支援により、2008年6月に会計年度第3期を終了いたしました。活動へのご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

第3期終了に伴い、7月26日に理事会を、8月31日に総会を開催し、活動と収支の報告及び第4期へ向けた計画の承認をいただきましたことをご報告申し上げます。

第3期は平成19年7月の新潟県中越沖地震、平成20年5月のミャンマー連邦におけるサイクロン被害と中国四川大地震、6月の岩手・宮城内陸地震等におきまして、先遣隊と医療チームの派遣を行うことができました。また、迅速な派遣と適切な医療活動を行うため災害医療と国際協力の講習会を行い、174名の修了者を輩出しております。

皆様からの年会費、寄付、募金活動はこのような活動費、医薬品の輸送費等に使わせていただいております。また、隊員の現地派遣に伴う人的、物的不足を補う皆様のご協力により支えられています。誠にありがとうございます。

理事会、総会では第3期の活動と会計収支のご報告、第4期に向けた計画をご承認いただきました。課題として、新規・継続会員を共に増やす努力が求められました。TMATでは会員一人ひとりに活動の報告を届け、いただいた会費の用途を説明し、継続したご支援をお願いしてまいります。また、活動報告会を地域に開かれた形で開催できるように病院にご協力頂き、開催していく所存でございます。

今後も「生命だけは平等だ」の理念・哲学のもと、災害医療と国際協力を担う人材育成のための講習会の開催や、海外との医療協力関係の構築、募金活動など災害医療活動に備えた活動を展開し、災害が発生した際には迅速に現地に駆けつけ、活動を行えるように努力してまいります。

本年度も、会費納入、寄付、募金活動、また医薬品や医療資材の寄贈等、様々な形でご協力いただけましたら幸甚でございます。引続き温かいご支援を宜しくお願い申し上げます。

NPO法人　TMAT

「生命だけは平等だ」の理念・哲学のもと、災害医療救援活動や医療技術支援活動を通して、よりよい医療を世界中の人たちがうけられるように活動を行っています。
会員を募集しています!

年会費　正　会　員：10,000円
　　賛助個人会員：2,000円
　　賛助団体会員：30,000円

〈東京本部〉
〒102-0083
東京都千代田区麹町4-6-8
ダイニチ麹町ビル2F
Tel.03-3263-8136　Fax.03-3263-6664
E-Mail.info@tmat.or.jp
URL.http://www.tmat.or.jp/

〈大阪本部〉
〒530-0001
大阪府大阪市北区梅田1-3-1
大阪駅前第一ビル12F